

2020.7  
vol.2

# Diversity & Inclusion

～“いのちのつながり”に貢献する医療、研究のために～

## 新型コロナウイルス流行に伴う、業務継続のための医師・研究者等への支援策について

今般の新型コロナウイルス流行を受けた小中学校の一斎休校、ならびに緊急事態宣言発令の影響による認可保育所等の登園自粛要請などに伴い、医師・研究者等の皆さまが円滑に業務を継続できるようにするために、本事業の関連機関は、保育支援や在宅勤務をはじめとする以下のような支援策を講じました。

### 日本医科大学

臨時休業等をした小学校等※1に通う子どもも及び感染した子どもなど※2が小学校等を休む必要がある場合で保護者として世話をを行う場合、所属長が認めた日数の休暇を特別休暇として取得できることとしました。また、基礎科学・基礎医学の教職員の勤務については、学長の許可の下、各部署長の責任において、勤務時間のシフト、自宅勤務等所掌業務に支障を来さない勤務態勢をとることができるようにしました。

日本医科大学付属病院(東京都文京区)、武蔵小杉病院(神奈川県川崎市)、多摩永山病院(東京都多摩市)、千葉北総病院(千葉県印西市)の各付属病院に併設の保育園では、緊急事態宣言発令の影響で各自治体の認可保育所等から登園自粛要請が出るようになって以降も、手指消毒やマスクの着用等の衛生管理を徹底しながら、保育の受け入れを継続しています。

このうち、武蔵小杉病院の「すくすく保育園」では、子どもの受け渡しは玄関口で行い、園内が過密にならないようにしています。年長児

は保育中のマスク着用をお願いしているほか、食事中は間隔を開けて静かに食べるようになり、飛沫予防に努めています。さらに、おもちゃやドアノブなど、園内設備の消毒・清掃も行っています。子どもたちに対しては、手洗いをしながら自分で感染予防できるよう声掛けをしたり、人が少ない時間帯に散歩にも連れ出したりして気分転換を図っています。同園では、職員に毎日の検温、こまめな手指消毒・マスク着用といった感染予防対策を行うことに加えて、体調不良時には無理に出勤しないよう伝えています。



※1…小学校、幼稚園、保育園(所)、特別支援学校、放課後児童クラブ等 ※2…新型コロナウイルスに感染した子ども、新型コロナウイルスに感染したおそれのある子ども(発熱等の風邪症状、濃厚接触者)、医療的ケアが日常的に必要な子どもまたは新型コロナウイルスに感染した場合に重症化するリスクの高い基礎疾患等を有する子ども

### 日本獣医生命科学大学

日本医科大学と同様に、COVID-19に係る休暇として、特別休暇を取得できることになりました。

教職員の勤務についても、学長の許可の下、各部署長の責任において、勤務時間のシフト、自宅勤務等所掌業務に支障を来さない勤務態勢をとることができるようにしました。動物医療センターの研究者は、特別休暇を使いながら診療も行っています。

### アンファー株式会社

出勤率80%以上減実現のためのリモートワークでの環境整備として、在宅でのデータサーバーアクセス、労務管理、データの電子化を取り組んできました。緊急事態宣言発令以降、出勤率20%を達成しています。出勤する社員についてもほとんどが時差出勤をしており、かつ16時半までに退社することをルールとしました。

新型コロナウイルス対策による全国公立小中高校の一斎休校対策の一環として、内閣府より企業主導型内閣府ベビーシッター派遣事業割引券が発行されています。詳細はしあわせキャリア支援センターまでお問い合わせください。

## Message

### 社会全体でダイバーシティ推進を



日本獣医生命科学大学  
獣医学部 獣医衛生学研究室  
准教授 落合 和彦

日本獣医生命科学大学(以下、日獣大)で、ダイバーシティ推進委員会の副委員長を拝命しています。妻は私と同じく獣医師で農林水産省に勤務、小学4年生の長男と小学1年生の長女の4人家族です。妻もフルタイム勤務のため、子どもたちが急に熱を出したりしたときなどは、比較的時間に自由の利く私のほうが対応する場面が多いです。

ダイバーシティ推進委員として思うのは、眞のダイバーシティ推進は「自分の職場内にとどまらず、パートナーとその職場にも波及するもの」でなくてはならないということ。つまり、ダイバーシティ推進は一組織だけでなく、社会全体として取り組むべきものだということです。

周りを見渡すと、家事・育児に積極的に取り組んでいる同年代の男性教員は、教育や研究でもしっかりと成果を上げている方が多いように思えます。常に突発的な事案の発生への危機感を持ち、能率的に仕事を進めていくからでしょう。これからは特に、若い教員が研究を能率的に進められるような環境づくりにも力を入れたいと思っています。

### 研究支援員の派遣受けて効率アップ



日本医科大学  
生化学・分子生物学(分子遺伝学)教室  
助教 笠原 優子

私は、筋ジストロフィーに対する細胞移植技術の実用化に向けた基盤研究を行っています。幹細胞を用いて筋ジストロフィーの炎症を抑える新しい治療法です。治療研究をしているのであれこれやってはみたいものの手が足りないため、研究支援員の配置制度に応募しました。実験が大変な時に手伝っていただけるよう、週2日フルタイムで来ていただいている。

一人でやっていると時間が限られて、夕方近くに時間的な制約が来てしまいますが、2人いると手が2倍になります。今まであきらめていたことを実現できるようになりました。協力していただけるので、仕事の効率も良くなりました。自分一人では気づけなかったことに対して、新しい視点を提案してもらったりするのも、とても心強いです。

現在、小学生2人の子育て中です。家に帰ると研究から離れて、頭を切り替えて、はじめをつけないといけません。研究は研究、子育ては子育て。そのどちらも充実させたい。貴重な機会をいただいて良い研究環境を作っているので、社会の役に立つ研究をしなければならないと思っているところです。

### 医師と研究者を両立しながら続けたい



日本医科大学付属病院  
女性診療科・産科  
助教・医員 市川 智子

私は産婦人科医で、周産期と生殖を専門にしています。大学院では流産の研究をしており、現在は超音波を用いて特に妊娠初期の血流を評価することで不育症についての研究を行っています。

9歳と5歳の子どもがおり、上の子どもは小学生で学童保育を行っています。朝は下の子どもを保育園に送つてから出勤、18時15分までに迎えに行かなければならないため、それまでに急いで仕事を終わらせて迎えに行きます。

こうした生活の中で週に1回、同じシッターさんに自宅に来ていただく育児サポートを利用させてもらっています。食事作りから掃除、子どもの習い事の送りもやってもらっています。そのおかげで私自身がやらずに済むことが増えて、精神的にも休める安心感があり、とても助かっています。もっと多くの皆さんができるといいと思います。

大学院で研究しながら新しいことが分かる喜びも経験したので、医師と両立しながら研究のほうもできるだけ続けたいです。後輩にも同じような経験をしてもらいたいので、自分も指導できる立場になりたいと思います。

# アンケート結果

## ワーク・ライフ・バランス等に関するアンケート調査

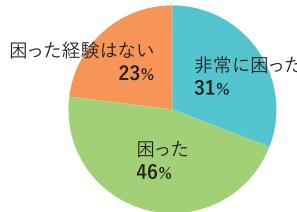
2019年度に採択された文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」の一環として、2019年12月に日本医科大学・日本獣医生命科学大学の教員と研究者に対し、「ワーク・ライフ・バランス等に関するアンケート調査」を実施しました。

本事業ではこの調査結果を、病児保育を含む育児支援制度や、ライフイベントに伴う働き方に柔軟な対応ができる職場づくり、留学支援制度などの検討に活用し、研究者がキャリアを継続し活躍できる研究環境の整備を行います。

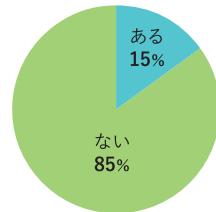
### 病児保育ニーズの高さ

子どもの病気のため仕事で困った経験があるのは76.8%と高い一方で、病児保育の利用経験者はわずか15.3%でした。子どもが病気になった場合は、自らが休暇を取り対応(52.4%)、祖父母など家族に預ける(43.6%)、などが多く、本学に病児保育制度ができれば利用したいと95%が回答しました。

あなたの勤務日に子どもの病気のために、出勤に際してあなたが仕事上困った経験はありますか。(n=275)



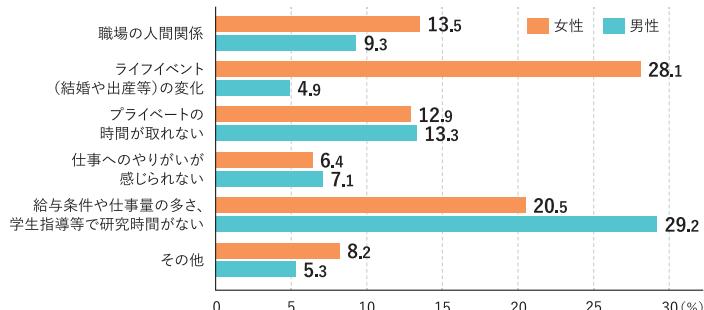
これまでに病児保育を利用した経験はありますか。(n=275)



### キャリア継続を妨げる要因

「ワーク・ライフ・バランスの観点から離職を考えるなど、このままの働き方ではキャリアの継続が困難だと感じたことがある」のは全体の77.9%でしたが、女性では89.5%と割合が高く、その理由の第1位はライフイベント(結婚や出産など)の変化でした。一方男性においては、ライフイベントの変化を挙げたのは4.9%と最下位であり、男女差が明らかになりました。

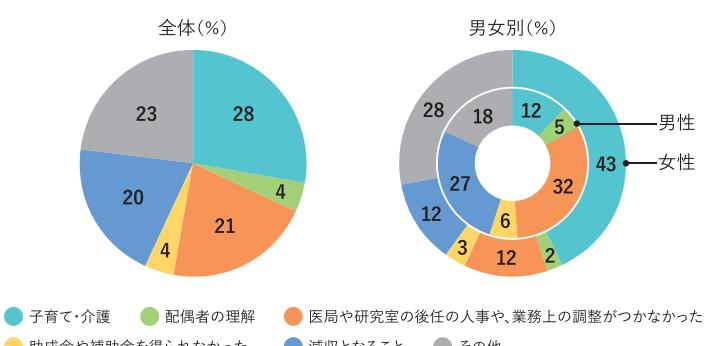
ワーク・ライフ・バランスの観点から、離職を考えるなど、このままの働き方ではキャリアの継続が困難だと感じたことがありますか。ある方は、以下の中でももあてはまる理由をお選びください。(n=398)



### 留学支援のニーズ

海外留学経験者は、6割以上が配偶者や子どもを帶同しており、留学先の選定は上司や前任者のすすめが最多(51.6%)でしたが、32.6%が自分で留学先を見つけていたことが明らかになりました。留学経験者の99%が「留学が良い影響を及ぼしている」と回答しました。留学未経験者が留学をしない理由としては、子育て・介護(27.7%)が最多で、さらに対象を女性だけにすると、この割合は43.4%になりました。

研究や臨床を目的とした海外留学について、留学を選択しなかった理由として最も近いものは何ですか。(n=303)



#### 調査概要

【回答方法】無記名・WEB回答

【有効回答数】398件

【対象者】日本医科大学と日本獣医生命科学大学の教員および研究者

【実施期間】2019年12月16日(月)～2020年1月2日(木) 22:00

## 活動報告

### マネジメント力養成講座

#### アンコンシャスバイアス(無意識の偏見)の基礎知識を学ぶ

2020年2月14日(金)、日本医科大学で、教職員を対象に「マネジメント力養成セミナー～アンコンシャスバイアス(無意識の偏見)の基礎知識～」を開催し、48名の参加がありました。講師にパク・スックチャ氏をお招きし、無意識の偏見について、ご自身のご経験を元に、事例を交えながらご説明いただきました。「客観的事実に対して、人はそれぞれの意味付けをしていること」や「無意識の偏見への対処法」など、参加者にとって、将来のキャリア、さらには人生を描く上で必要な多くの“気づき”を得る機会となりました。



#### 2020年度の 主な取り組み

本事業では、2020年度は以下3つのテーマに即した各取り組みを実施して参ります。  
(2020年7月現在)

#### 1 ダイバーシティ研究環境整備

- 新型研究支援員配置制度の運用
- 連携機関における共同研究への研究費補助制度の運用
- 時間短縮勤務制度利用者のキャリア継続支援
- 保育支援制度の運用
- One Health特設ウェブサイトやニュースレターにおけるロールモデル紹介
- ダイバーシティ意識向上シンポジウムの開催
- 「いのちのつながり」に関する講演会の開催
- 若手研究者キャリアデザインプロジェクトの実施
- 地域との連携強化、次世代研究者育成
- 女子学生に向けたキャリアパスセミナーの開催

#### 2 女性研究者研究力向上・ リーダー育成

- 研究力向上に向けた留学支援の促進
- 外部研究費獲得に向けたセミナーの開催
- 女性研究者を対象としたアカデミックアドバイスの実施
- 英語論文強化やプレゼン力向上等の特別講習の開催

#### 3 女性研究者の上位職への 積極的登用

- 英文校閲費用助成制度の運用
- マネジメント力養成講座の開催

文部科学省科学技術人材育成費補助事業 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)

【代表機関】日本医科大学 【共同実施機関】日本獣医生命科学大学 アンファー株式会社

【編集・発行】学校法人日本医科大学 しあわせキャリア支援センター 〒113-8602 東京都文京区千駄木1-1-5 TEL 03-3822-2131 [one-health.jp](http://one-health.jp)

### ダイバーシティ環境推進の周知の取り組み

#### ダイバーシティ環境推進の 動画とポスター・チラシの作成

日本医科大学と日本獣医生命科学大学では、ダイバーシティ環境推進の取り組みについて動画を作成しました。支援を受けて活躍する女性研究者の紹介や本事業の取り組みを紹介しています。日本獣医生命科学大学では、ダイバーシティ環境推進のポスターとチラシを作成しました。本事業の目標や取り組みを記載しています。動画およびポスター・チラシは本事業のホームページでご覧いただけます。(右下のQRコードからもご覧いただけます)



ダイバーシティ環境推進動画とポスター

